

[Research Report]

Evaluation of Educational Effect about Student-Centered Orientation of Clinical Practice

Motomu Yamaguchi*, Makiko Ohkawa*, Emiko Wada*, Kiyoe Watanabe*, Sachiko Matsui*
Yoshie Kimoto*, Yoko Honda*, Hisako Kobayashi*, Naoko Naitoh*, Katsuya Kanda*

*Aino University, Faculty of Nursing and Rehabilitation

Abstract

The purpose of this study is to discuss educational effect of a new type of orientation introduced in 2011 for students taking a nursing practice course. It aimed to ease their stress and anxiety and get them ready for the course. Under the new system, the would-be practice course students joined the presentation session held at the end of the ongoing course. This works as an orientation given by the experienced students.

Descriptions submitted by the students were categorized into “similarity” and “relativity” by the KJ-method. As a result, **[Stage to review knowledge acquired by preparatory study]** **[Reluctant attitude to attend preparatory study]** **[Improvement of performance based on effective practical]** **[Sanctity of life learned via practical]** **[Association with instructors of practical]** **[Relationship among personnel at practical]**

The student-lead orientation will facilitate the practice course and enhance students' self-learning.

Key Words : Clinical practice, Student-centered orientation, Educational Effect, Presentation of learning

学生主体で行う実習のオリエンテーションの教育的効果の評価

山口 求*, 大川 眞紀子*, 和田 恵美子*, 渡邊 清江*
松井 幸子*, 木本 佳恵*, 本多 容子*, 小林 久子*
内藤 直子*, 菅田 勝也*

【要旨】 看護教育における臨地実習は、不安や緊張が高く、自己効力感が低い状態で実習に臨む傾向にある。そこで、学生の実習に対する意欲を高めるために、2011年度の実習から学生主体の実習オリエンテーションを導入した。その方法は、履修グループの実習終了時の「学びの発表」に未履修グループを参加させるものである。学生主体の実習オリエンテーションの教育的評価を検討することを目的とする。学生の倫理的配慮では、匿名性、参加の自由性と不利益を被むらないことを説明した。倫理委員会の承認を得て調査を行った。

学生の記述内容を質的統合法（KJ法）により「類似性」「関係性」に分類した。結果、【準備学習の知識を整理する段階】【準備学習への消極的な参加姿勢】【効果的な実習の実践力の向上】【実習で学ぶ生命の尊さ】【実習指導者とのかかわり】【実習での人間関係の構築】6カテゴリーが抽出された。教員によるオリエンテーションは、「勉強しないとついていけない」という気持ちや焦りにつながる傾向がある。しかし、実習履修学生の実習での感動体験を聴くことにより、実習のイメージ化が可能になり、学生の不安を軽減し積極的に実習に臨める教育方法であることが示唆された。

キーワード：臨地実習、学生主体のオリエンテーション、教育効果、実習の学びの発表

I はじめに

現代の看護学生は、少子化の中で育ち、積極的に他者に働きかけることが少なく、また関心も低くなってきている。さらに、人間関係も表面的になっており、やさしさや思いやり行動が育ちにくい生活環境にあると言われている¹⁾。看護は、患者と看護者の人間関係が基盤となり、コミュニケーション技術は患者と看護者の関係に大きく影響を及ぼす。つまり、看護学生にとって臨地実習は、学生間の相互の理解を深め、看護に重要な患者の傾聴や共感を獲得する重要な体験学習である。

看護教育の一般的な方法は、教員が教授するという一

方向の授業形態が主流であるが、学生が主体となる授業を試みる必要性が示唆されるようになり、学生主体の授業が一部では導入され始めている²⁾。看護学の臨地実習においても、何をどこまで「教える」のではなく、学生が何をどこまで「学ぶのか」を示すことが重要であると報告されている³⁾。つまり、学生が学ぼうとする力を「引き出す」ことであり、教員は「学生を指導する」という方法から、「学生をサポートする」方法へと、教員の指導方法から学生主体の学習方法の意識が高まり、学生主体の授業に取り組む大学も増えている⁴⁾。

しかし、学生主体の実習のオリエンテーションに関する研究は見当たらない。香川・櫻井⁵⁾は、学内授業

* 藍野大学医療保健学部

で教えられてきたはずであるにもかかわらず、学生は学んできたことを臨地実習でうまく活用できないことを指摘している。

また、白木・宇佐美⁶⁾の老年看護学のオリエンテーション方法の工夫では、従来の「実習手引き」に加えて「自己学習の手引き」と「技術演習」を取り入れた結果、学生の自己課題が明確となり、自己学習の要点をおさえることができ、学生主体の必要性を示唆していると考えられる。

教員が行う臨地実習オリエンテーションは、実習到達目標に向けた指導が主流であるとなるために、教える教員と学ぶ学生にギャップが生じやすく、学生のやる気を無くし「看護」に対する思いすら見失う結果を招いていると考えられる。教員主体のオリエンテーションの方法から、学生が主体となる方法を試みた。それは、履修学生が臨地実習で自らが獲得した看護に対する感動体験や感性を「学び」を発表する事である。実習オリエンテーションに「学びの発表」を導入した。

本研究は、教員の指導型から学生主体のオリエンテーションにより、学生の实習体験を「生の声」として伝えられることで、実習のイメージ化につながり、実習に対する不安の軽減や、学習への学習意欲を向上が期待でき、実習を効果的にすることにあり。

II 研究の目的

学生の臨地実習に対する学習への意欲を高めるためには、教員が行う実習オリエンテーションに限界があると考え、学生主体の実習オリエンテーション「学びの発表」を導入した。履修学生の体験に基づいたオリエンテーションを聴くことにより、未履修学生の心理的不安の軽減や実習意欲の向上となり、実習の教育効果の評価となるかを検討することを目的とする。

III 研究方法

1. 研究デザインは、自由記述調査研究
2. 研究の対象は、A大学2011年度実習履修学生(3年生)73名
3. 研究方法は、実習履修グループの実習終了時に「学びの発表」に未履修グループを参加させる独自の方法を実施した。領域実習終了後に、履修学生に小児看護学の学びの到達度に関する自由記述の調査を行った。
4. 分析方法は、全ての実習終了後に「実習での学

び」について自由に記述してもらった。①その記述内容を質的統合法(KJ法)により分析した。カードの意味内容の「類似性」「関係性」からカード(生データ)の分類をした。②分類したカードの単位化を行い、内容から[表札(サブカテゴリとする)]をつけ、表札の妥当性を検討した。③関係する表札から【シンボルマーク(カテゴリとする)】をつけた。④記号を用いて全体の図解化を作成した。

5. 研究期間は2011年度の全ての領域実習終了後の2012年7月～8月に実施した。

6. 用語の定義

- 1) 質的統合法(KJ法)とは、川喜多のKJ法⁷⁾をもとに、山浦⁸⁾が開発したものであり、「説明のついていない」不規則的現象を「仮構的に解読」して「有意味で合理的な全体像として把握する」方法であり、「仮構築」の方法であるとしている。いくつかの理論をモデルとし、考察までの思考過程(図3)を明らかにすることで、質的研究の妥当性、信頼性が明らかになる研究としている。

調査内容(生データ)をカード化し、内容の意味の「類似性」と「関係性」から分類し、カードを単位化する。単位化したカードからグループ化して統合化する。それに[表札:サブカテゴリとする]をつける。「類似性」から「関係性」へと構造化する。

- 2) 学生主体のオリエンテーションとは、本研究の操作上の定義であり、実習履修学生が臨地実習終了後に学内で「実習での学びの発表」をディスカッション形式で行う。その発表に未履修学生が参加する。討議の際に、教員が介入し、実習内容を具体的に説明するように促し、聴く側にイメージ化が可能となるように配慮する。つまり、履修学生の実習体験を説明することから、学生が主体となるオリエンテーションとなる。未履修学生は、追体験学習となり、実習の準備学習や実習意欲の動機づけになるように工夫した方法である。

7. 倫理的配慮

- 1) 対象者への研究依頼は、研究目的と方法を口頭と書面により説明し協力を得る。
- 2) 対象者の人権保護については、研究参加の自由、匿名性、情報を守秘することを説明し、同意を得る。

- 3) 研究に不参加の場合、また途中で参加を中止しても不利益を被らないこと。また、成績とは関係のないことを説明する。
- 4) 研究データの管理は、研究者が厳重に保管し研究終了後にシュレッダーで廃棄する。
- 5) 研究成果発表を学会及び学術誌への投稿することの同意を得る。

以上の倫理的配慮を、大学の倫理審査を受け、委員会の承認を得て調査を行った。

IV 結 果

質問紙に回答した学生は、74名中63名(90%)であった。2日間のNICU実習(NICU; neonatal intensive care unit)見学実習で指導者の指導と見学により

学んだことが主な回答内容であった。

学生の質問紙の記述内容を質的統合法(KJ法)により分析した。結果を図1に示した。【事前学習知識を整理する段階】【事前学習への消極的な参加姿勢】【効果的な実習の実践力の向上】【実習で学ぶ命の尊さ】【実習指導者とのかかわり】【実習での人間関係構築】の6つのカテゴリーが抽出された。調査内容をカード化し、意味の類似性から分類した。得られたカード枚数は120枚であった。

カード内容を分類し、表1に示した。もっとも多かったのは【効果的な実習の実践力の向上】が42枚であった。次いで【実習で学ぶ命の尊さ】の25枚であり、【実習での人間関係の構築】23枚であった。【実習指導者とのかかわり】は19枚、続いて【事前学習の準備段階】となっていた。

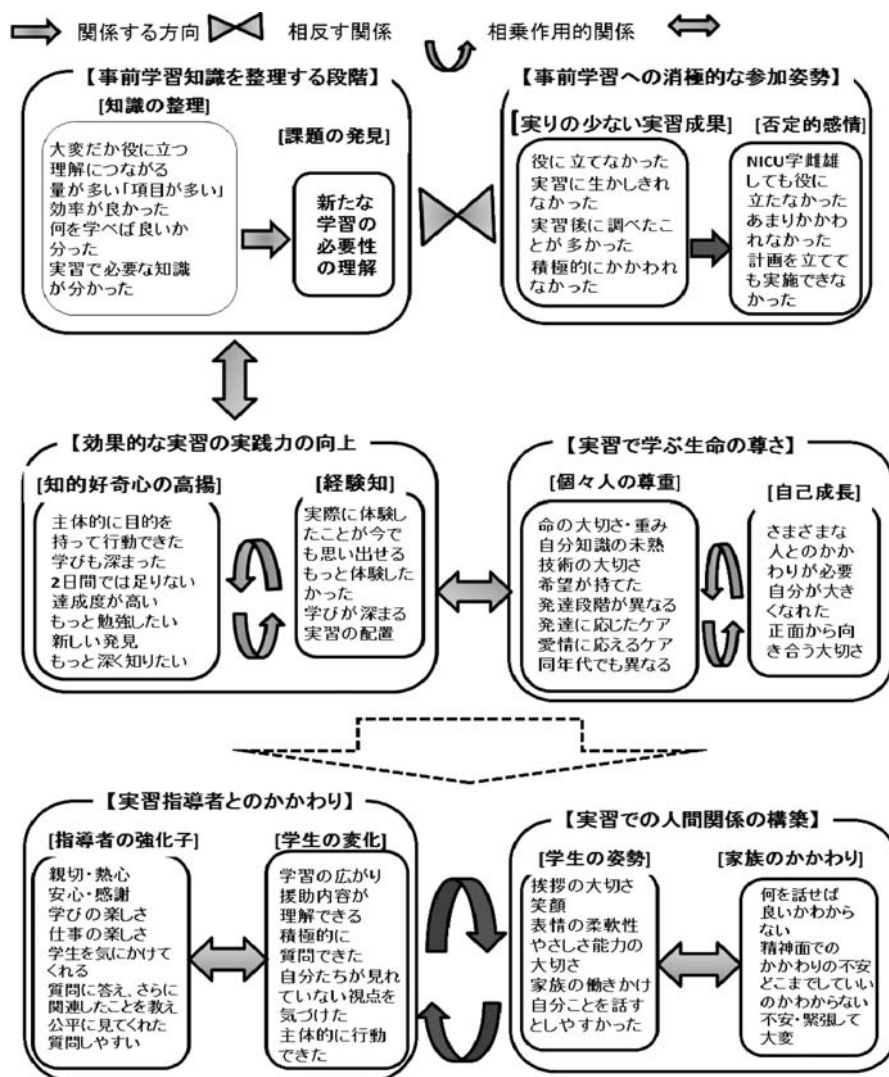


Fig. 1 Educational effect of the student-lead orientation

表1 カテゴリー別カード枚数

n=73

事前学習の準備段階	事前学習への消極的姿勢	効果的な実習実践力の向上	実習で学ぶ命の尊さ	実習指導者とかかわり	実習での人間関係の構築	合計
18枚	11枚	42枚	25枚	19枚	23枚	120枚

結果は、6つのカテゴリーを以下の3点に整理できた。

1. 事前学習に関する学び

カード内容には「大変だが役に立った」「理解につながる」「量が多い」「項目が多い」「効率が良かった」「何を学ばば良いかわかった」「実習に必要な知識がわかった」などの事前学習に効果的であることを示す内容から【事前学習の知識を整理する段階】とした。

サブカテゴリーとして、事前学習の知識を整理でまとめられ【知識の整理】とした。さらに、「新たな学習の必要性の理解」から【課題の発見】とした。

一方、相反するカテゴリーには、「役に立てなかった」「実習にいかしきれなかった」「実習後に調べたことが多かった」「積極的にかかわれなかった」などから【実りの少ない実習】とした。また、「事前学習が必要でなかった」「ベビーや母親にあまりかかわることがなかった」「計画をたてたが援助できなかった」などから【否定的な感情】とした。この2つのサブカテゴリーから【事前学習への消極的な参加姿勢】が挙げられた。

2. 効果的な実習の体験からの学び

カード内容から2つのサブカテゴリーが挙げられた。「主体的に目的をもって行動できた」「学びも深まった」「2日間では足りない」「達成度が高い」「もっと勉強したい」「新しい発見」「もっと深く知りたい」のカード内容から【知的好奇心の効用】とした。

また、「実際に体験したことが今でも思い出せる」「もっと体験したかった」「学びが深まる実習の配置」など、実習が効果的であることを示した内容から【経験知】とした。

事前学習の知識が整理された段階から、次に実習の学びへと発展させた内容の【知的好奇心の効用】と、実習に臨む肯定的感情の高さから【知的好奇心の効用】は、【効果的な実習の実践力の向上】とまとめられた。

さらに、「命の大切さ・重み」「自分の知識の未熟さ」「技術の大切さ」「希望が持てた」「発達段階が異なる」「発達に応じたケア」「愛情に応えるケア」「同

年代でも異なる」などのカード内容から【個々人の尊重】とした。2つのサブカテゴリーは、相互作用的に働く関係を示しており、【実習で学ぶ命の尊さ】でまとめられた。

3. 実習の人間関係からの学生の成長

指導者の学生に対する姿勢から「親切・熱心」「安心・感謝」「学びの楽しさ」「仕事の楽しさ」「学生を気にかけてくれる」「質問に答え、さらに関連したことを教え公平にみてくれた」「質問しやすい」カード内容から【指導者の強化子】として挙げられた。また、「学習のひろがり」「援助内容が理解できる」「積極的に質問できた」「自分たちが見れていない視点に気付けた」「主体的に行動できた」などのカード内容から【学生の変化】が挙げられた。

2つのカテゴリーから「学びの楽しさ」「仕事の楽しさのカード内容であり【実習指導者とかかわり】としてまとめられた。

さらに、「挨拶の大切さ」「笑顔」「表情の柔軟性」「やさしさ、能力の大切さ」「家族の働きかけ」「自分のことを話すとしやすかった」「学生の姿勢」とした。また、看護の難しさでもある家族にまで学びを発展させており、「何を話せば良いかわからない」「精神面でのかかわりの不安」「どこまでしていいかわからない」「不安・緊張してたいへん」などの【家族のかかわり】が挙げられた。【指導者の強化子】と【学生の変化】は、波及効果とも言える【学生の姿勢】が挙げられた。さらに、家族の関係に発展しており【実習での人間関係構築】としてまとめられた。

V 考 察

学生の自由記述の内容を質的統合法(KJ法)の「意味の類似性」と「関係性」から分類し、得られたカードの単位化からは、従来の教員主体のオリエンテーションで得ることのできなかった学生の主体的な実習への意欲向上や学習効果が得られており、学生主体のオリエンテーションの導入の効果について考察する。

1. 事前学習に関する学び

学生にとって臨地実習は、多大な知識と対象者との関係、未知な経験に対する不安やストレスを抱えて臨まなければならない。学生の不安の調査報告では、実習に不安を感じている学生が80%に達しており、特に患者とのコミュニケーションに困難感を強く抱えている。このような状況は、ストレス行動や対処行動に対する自己効力感を左右し、学生の臨地実習への心理的適応に強く影響すると推測される。

【事前学習の知識を整理する段階】としたカテゴリーは、[知識の整理]と[新たな課題の発見]と2つのサブカテゴリーに分類されており、「理解につながる」「実習に必要な知識がわかった」「役に立つ」など事前学習の効果を反映した内容になっている。さらに、「新たな学習の必要性の理解」という、学生自ら課題を発見できている。この事前学習の知識を整理する段階は、すでに実習に臨む学生の自己効力感につながっていると考える。実習に対する不安は、実習に取り組む姿勢となり、心理的適応能力にも影響を及ぼすことが窺え、実習への動機づけとなると言えよう。

一方、相反する関係に実習に臨む姿勢も[否定的な感情]であり、「学習をしたにもかかわらず役に立たなかった」や「実習計画を立てたが役に立たなかった」という【事前学習への消極的な姿勢】は、学生の理解も関与していると考えが、他者から学ぶ姿勢が低いことが窺える。現代の学生は、今までの座学同様に受身で主体的に行動する姿勢に欠けており、ひいては自尊感情の低下にもつながり、実習の学びも達成することが考えられ、さらに詳細に分析し、今後の課題として取り組む必要がある。

2. 効果的な実習の体験からの学び

相互関係に働く[個々人の尊重]は、さらに、[自己成長]へと発展しており、「さまざまな人とのかかわりが必要」「自分が大きくなれた」「正面から向き合う大切さ」などのカード内容からなっていた。

実習を効果的にすることができた学生は、改めて実習からの学びを振り返ることができていた。その内容は、「事前学習で知識の整理」をして、自分の「知識の不足」や「知識の必要性」に気付いていた。また、図解化に記載していないが看護師の「観察や洞察力」のすごさに感動していた。また、「泣くと声をかける」「なでる」などの「ベビーへのやさしいかかわり」があり、「看護によってベビーは守られている」という感動体験であると同時に実習で必要な内容を学べてい

た。

一方、効果的な事前学習の段階で知識を整理し、新たな課題を発見できた学生は、さらに、波及効果として効果的な実習ができている。「主体的に目的をもって行動できた」このカード内容は、実習でこそ得られる実践力である。さらに、「達成感が高い」「もっと深く知りたい」という[知的好奇心の高揚]があり、実習の感動体験を他の学生に伝えると同時に、「もっと体験したかった」「今でも体験したことを思い出せる」という実習の学びを再現しており、成長し続けることを望んでいることがわかる。自分で自分の思考プロセスを俯瞰しつつ質の高い目標達成を表現する力となり、自ら学ぶ意欲が高まるだけでなく、自己効力感の向上にも有効と考える。

効果的な実習は、知的好奇心を高めると同時に、実習の「経験をさらに深めたい」という看護は実学であり、体験することにより学べることの意味であり、看護実習における[経験知]なのである。シンボルマークは【効果的な実習の実践力の向上】が適切であると考える。実習での体験をいかすことのできた学生は、プレゼンテーション(学びの発表)だけに終わらないで、ナラティブをすると同時に自分が実践してきたことを再構築する訓練の場とすることができており、実習の教育効果と評価できる。

3. 実習の人間関係からの学生の成長

学生の経験を成功体験につなげるための臨地実習指導者の関わりを明らかにすることに取り組んだ伊藤⁹⁾の抽出した5つのカテゴリーは、【指導者がモデルになる】【学生主体】【安全の保証】【患者と学生の雰囲気づくり】【個別性を理解してほしい思い】であり、

本研究結果の[実習指導者の強化子]による【実習指導者とのかかわり】は、5つのカテゴリーと同様な結果であり、学生の実習の成功体験につながることを示唆するものである。

さらに、指導者の学生に対する姿勢から、「学習のひろがり」「援助内容が理解できる」「積極的に質問できた」「自分たちが見れていない視点に気付けた」「主体的に行動できた」という[学生の変化]が挙げられ、指導者と学生との相互作用的な関係から、【実習での人間関係構築】というもっとも困難である実習の到達目標が達成できる効果的な実習と言える。

教員主体のオリエンテーションでは、実習が学生にとって心理的に負担だけでなく、過酷とも言える学

習量を課せられていると受け止める傾向にあるのが現実である。しかし、実習体験を「生の声」により伝えられ、臨んだ実習は、学生が自らの態度を振り返り、自己の変化に気づき、「挨拶の大切さ」「笑顔」「表情の柔軟性」「やさしさ、能力の大切さ」など看護における姿勢を変容させる要素を見出すまでに成長させている。学生自らの教育力を強化する自己効力感の向上になることが推察される。

つまり、教員の行うオリエンテーションでは得られない、学生主体のオリエンテーションは指導者との直接的なかかわりから自己を評価する力や不安・緊張を軽減する環境づくりにつながっていると考えられる¹⁰⁾。

特に現在の学生の特性は、精神的に弱く、他者からの批判を極度に恐れ、発言できない傾向の学生が多い。この心理的な不安を抱く傾向の学生は、実習に対する不安に拍車をかけ、学生のグループ間での関係もストレスフルな状態で実習に臨むのである。実習が効果的にできることを望む方が無理なのである。また、指導者や患者とのコミュニケーションに困難感をもっていることは、これまでの看護教育に関する研究でも報告されている¹²⁾。

「看護する」の素晴らしさや「命の大切さ」にかかわり、自分のありようまでも振り返ることにつながっている。このことは学生の自信や意欲につながり、自己効力感¹²⁾とも言えるモチベーションを高めていると言えよう。

したがって、ストレス・コーピング能力の低い傾向にある学生は、不安や緊張がストレスとなり、実習中に食欲や睡眠の確保も困難に陥りやすく、体調を崩す結果を招いている。しかし、指導者とともに実習での学びの体験は、学生の成功体験につながり、学生が実習で到達すべき行動を確認することに加え、自らを知ることになると推察する¹³⁾。

さらに、患者との十分なコミュニケーションやグループ間のチームワーク能力、クリティカルシンキング能力といった指導者と学生との共通した実習到達目標となっている。したがって、積極的な実習姿勢へと導く学生主体のオリエンテーションは、体験から得られる貴重な実習の教育評価の要素と考え、この取り組みは実習オリエンテーションの効果的な知見と言えよう。

VI 結 論

従来の教員によるオリエンテーションは、非効果的

と決め付けられないが、今回の学生主体によるオリエンテーションを導入し、学生の自由記述内容を、質的統合法(KJ法)より、分析した結果、教育効果の評価ができることが示唆された。

1. 【準備学習の知識を整理する段階】では、「知識が役に立つ」「何を学べば良いか分かった」と[知識の整理]ができ、さらに、知識の必要性理解するという[新たな課題を発見]できている。一方、【消極的参加姿勢】な学生は、同じ知識を学んでいるにも関わらず、[実り少ない実習成果]として「役に立たなかった」「調べたことが多かった」などが多く、実習に臨む姿勢の低さがある。「計画をたてても役に立たなかった」「かかわれなかった」などの、学生自らの[否定的な感情]がよく表れている。改善すべき課題である。
2. 準備学習を効果的にできた学生は、実習においても「主体的に行動できた」「達成度が高い」など知識を生かした実習ができ[知的好奇心の高揚]がある。さらに相乗効果として「体験したことをいまでも思い出せる」「もっと体験したかった」と、要するに[経験知]を獲得している。一言で言うと【効果的な実習の実践力の向上】なのである。その相互作用的に関連して【実習で学ぶ生命の尊さ】が挙げられ、[個々の人の尊重]や[自己成長]となっており、実習目標の到達を反映するものである。
3. 【効果的な実習の実践力の向上】と【実習で学ぶ生命の尊さ】から、波及効果とも考えられる、[指導者の強化子]と[学生の変化]は【実習指導者とのかかわり】となる。さらに、「挨拶の仕方」「表情の柔軟性」に気づき[学生の姿勢]は、[家族とのかかわり]に影響することを理解しており、【実習での人間関係の構築】となるのである。

以上のことから【事前学習知識を整理する段階】【事前学習への消極的な参加姿勢】【効果的な実習の実践力の向上】【実習で学ぶ生命の尊さ】【実習指導者とのかかわり】【実習での人間関係構築】の6つのカテゴリーは、実習に不可欠な要素であり、教育効果の評価の指標となる。

文 献

- 1) 尾原喜美子. 看護学生の関係づくり行動の変化：作成した関係づくり行動尺度を使用して. 日本看護研究学会雑誌 2006；29(5)：83-92.

- 2) 宮脇美保子, 深田美香, 高橋弥生, 内田宏美. 生活援助技術における学生主体の授業とその評価: グループ学習を導入して. *Quality Nursing* 2002; 8(9): 781-7.
- 3) 臼井えみ, 宇佐美規子. 老年看護学実習オリエンテーション方法の工夫 —— 実習前・後の老年看護に対する看護学生の意識の変化について ——. *日本看護学会論文集 老年看護* 2008; 38: 276-8.
- 4) 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり, 北島謙吾, 園田悦代, 種池礼子, 上野範子. 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. *日本看護研究学会雑誌* 2007; 30(2): 43-53.
- 5) 香川秀太, 櫻井利江. 学内から臨地実習へのプロセスにおける看護学生の学習の変化: 状況論における「移動」概念の視点から. *日本看護研究学会雑誌* 2007; 30(5): 39-51.
- 6) 奥田ゆかり, 谷口ひろ子. 精神看護学実習の準備性を高める実習オリエンテーション. *日本看護学会論文集 看護教育* 2005; 35: 6-8.
- 7) 川喜田二郎. KJ法: 渾沌をして語らしめる. 東京: 中央公論社; 1986. p. 32-3.
- 8) 山浦晴男. 科学的な質的研究のための質的統合法(KJ法)と考察法の理論と技術. *看護研究* 2008; 41(1): 11-32.
- 9) 伊藤まゆみ. 学生の経験を成功体験につなげるための臨地実習指導者の関わり. *神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録* 2012; 37: 132-9.
- 10) 9) 前掲
- 11) 今泉郷子, 末永由理, 佐藤栄子, 酒井郁子, 井上聡子, 佐藤正美. 受療過程援助論/援助技術でProblem-Based Learningを体験した学生の学習態度の変化. *川崎市立看護短期大学紀要* 2001; 6(1): 23-8.
- 12) 小笠原知枝, 吉岡さおり, 山本洋美, 秋山智, 江口瞳, 片山はるみ, 長谷川智子. 看護学生の臨床学習環境とストレス・コーピングに関する実態調査研究. *広島国際大学看護学ジャーナル* 2010; 7(1): 3-13.
- 13) 樋口恵子, 城丸瑞恵, 中谷千鶴子, 山田秀樹. 臨地実習における有効なオリエンテーション方法に関する検討. プログラムに病棟探索・他己紹介を取り入れて. *看護実践の科学* 2004; 29(8): 61-5.